

平成29年度 自 己 評 価 表（中間評価）

中長期目標 (学校ビジョン)		社会人として通用する人間を育てる		今年度の 重点目標	①生徒指導の充実:「時を守り、場を清め、礼を正す」 ②「確かな学力」の定着:基礎学力の定着＋キャリア教育の充実＋自信と誇りの育成 ③地域との連携を推進する			
年 度 当 初								
評 価 結 果 (10)月								
評価項目	評価の具体項目	現状	目標(年度末の目指す姿)	目標達成のための方策	経過・達成状況	評価	改善方策	
1. 生徒指導の充実:「時を守り、場を清め、礼を正す」	(時を守る) ・規則正しい生活習慣が身に付き、毎日 を健康に送ることができている。 ・遅刻、欠席がなく、授業の始まる前には準備が整い、意欲を持って学習に臨んでいる。	・多くの生徒は朝食を食べて登校するなど規則正しい生活習慣を維持できている。 ・生活習慣の乱れによる保健室利用は減少した。 ・欠席数は10%以上減少したが、週明けや週半ばの欠席が多い。 ・2学期中途から遅刻が増加したため、登校遅刻(者)数は増加した。 ・始業前の授業準備はほぼできており、授業遅刻も減少した。	・健康や安全に対する意識が高く、規則正しい生活習慣のもとに学校生活を送ることができている。(学校評価アンケートで「思う」とする割合が昨年度より5ポイント向上) ・学校を中心に据えた行動意識が醸成され、学校生活のルールに基づいた学習習慣が定着している。(欠席数・登校遅刻数が昨年度より10%減少) ・授業準備は始業前に整え、授業に意欲的に取り組むことができている。(学校評価アンケートで「思う」とする割合が昨年度より5ポイント向上)	・保健だより等をおして生徒・保護者に規則正しい生活と健康の大切さを啓発する。 ・生徒面談において、必要な生徒に対して生活指導を行う。 ・家庭への連絡を一層充実し、保護者と連携して生活習慣の改善を図る。 ・遅刻の多い生徒に対して、考査ごとに年次で指導を行う。 ・「入室許可書」の取組をもとに意識啓発を行い、授業遅刻のさらなる減少を図る。	・保健室だよりを毎月作成・配布し、生徒・保護者の啓発実施した。 ・平日の朝食摂取率が90%以上(6月自宅学習時間調査) ・生活習慣の乱れによる保健室利用も減少傾向にあり、規則正しい生活習慣を維持できている。 ・体調不良による授業中の保健室利用が減少している。 ・9月末時点で、欠席者数は昨年度より3.4%減、遅刻者数は昨年度より約22.9%減となっている。 ・授業遅刻の指導数も減少している。	B	・「保健便り」等によって健康管理に関する啓発活動を引き続き実施する。 ・生徒面談などをおして、良好な基本的な生活習慣が継続するように生徒の意識を高める。 ・保護者への遅刻・欠席連絡の徹底に継続して取り組む。 ・生徒の少しの変化も見逃さず、早期早めの対応を行う。 ・「入室許可書」の取組を継続する。	
	(場を清める) ・毎日の清掃活動を大切にし、気配りのある行動がとれている。 ・学校内が清潔に保たれ、整理・整頓が行き届いている。	・清掃活動は、職員の指導の下で概ね取り組めている。 ・教室内のゴミの分別が不十分である。 ・机の周りや個人ロッカー内の整理・整頓が不十分である。	・美化意識が高く、清掃活動に主体的に取り組んでいる。(学校評価アンケートで「思う」とする割合が60%以上) ・環境資源に配慮したゴミ分別ができている。 ・身の周りの整理・整頓ができ、学習環境を整える習慣が定着している。(学校評価アンケートで「思う」とする割合が昨年度より10ポイント向上)	・朝の清掃活動、TEAS活動をおして美化意識を高める。 ・環境教育LHR等、ゴミ分別について定期的に啓発活動を行う。 ・個人ロッカーや私物を整理する時間を定期的に設定する。	・清掃活動は職員の指導の下、概ね取り組めているが、生徒の主体的取組は不十分である。 ・ゴミ分別の意識づけが不徹底で、ゴミ分別状況は改善されていない。 ・私物ゴミの持ち帰りが不十分なため、可燃ゴミが増加傾向にある。 ・職員に私物ゴミの持ち帰りを呼びかけた結果、職員室のゴミは減量化している。 ・1学期終業式の日に時間を確保して個人ロッカーの整理を実施したので、個人ロッカーの整理は概ね良い。 ・私物を机上や床に放置したまま帰宅している状況が一部にみられる。	・委員会活動を活発化し、生徒の環境美化、ゴミの分別、ゴミの減量化についての意識の高揚を図る。 ・生徒にも私物ゴミの持ち帰りを徹底し、ゴミの減量化を推進する。 ・2学期末にロッカー点検を実施し、整理整頓についての意識の高揚を図る。 ・教室の学習環境を整えることの重要性を説き、私物の机上や机周辺への放置に対する指導を徹底する。	C	・委員会活動を活発化し、生徒の環境美化、ゴミの分別、ゴミの減量化についての意識の高揚を図る。 ・生徒にも私物ゴミの持ち帰りを徹底し、ゴミの減量化を推進する。 ・2学期末にロッカー点検を実施し、整理整頓についての意識の高揚を図る。 ・教室の学習環境を整えることの重要性を説き、私物の机上や机周辺への放置に対する指導を徹底する。
	(礼を正す) ・明るい笑顔で気持ちの良い挨拶ができる。 ・丁寧な言葉遣いと制服の正しい着こなしが保たれている。	・生徒会による挨拶運動の成果がみられ、自発的に挨拶する生徒が増加している。 ・TPOに応じた丁寧な言葉遣いが不十分な生徒がいる。 ・制服着こなしセミナーの効果もあり、大きな服装の乱れは減少した。	・明るい笑顔で相手の顔を見て自発的に挨拶ができる。(学校評価アンケートで「思う」とする割合が昨年度より10ポイント向上) ・TPOに応じた正しい言葉遣いができている。(学校評価アンケートで「思う」とする割合が昨年度より10ポイント向上) ・規範意識が高く、頭髪服装規程を遵守して制服を正しく着こなししている。(学校評価アンケートで「思う」とする割合が昨年度より10ポイント向上)	・生徒会による挨拶運動を継続する。 ・教職員自ら挨拶を実践するとともに、社会における挨拶の大切さを説いて啓発する。 ・教職員の共通理解のもと、丁寧に毅然とした姿勢での指導を粘り強く継続する。 ・制服着こなしセミナーを年度当初に実施して、身だしなみを整える意識を高める。	・生徒会による挨拶運動を実施した。 ・教職員等の挨拶に対するリアクションでの挨拶は増えてきたが、自発的な挨拶はもう少し課題がある。 ・TPOに応じた言葉遣いはまだ不十分である。 ・4月にすべての年次で制服着こなしセミナーを実施した。 ・制服の着こなしについては、大きな乱れはない。	・教職員による挨拶の実践と、生徒への啓発を粘り強く継続する。 ・日々の指導が大切であるという共通認識のもと、タイムリーな指導(声かけ)ができるように教職員間で情報共有しながら協力して行う。(言葉遣い、着こなし)	C	・教職員による挨拶の実践と、生徒への啓発を粘り強く継続する。 ・日々の指導が大切であるという共通認識のもと、タイムリーな指導(声かけ)ができるように教職員間で情報共有しながら協力して行う。(言葉遣い、着こなし)
	(場に応じた対応をとる) ・式典等で開始時間までに整列が完了できる。 ・服装を整えて式典に臨むことができる。	・式典や集会の集合は速やかにできている。 ・状況を判断して行動を整えるということについては不十分である。	・TPOを判断し、その「場」に応じた行動ができる。(社会人として通用する行動を身につける) ・集団行動の中で「時間」を意識して、速やかな整列ができる。 ・その場に相応しいフォーマルな制服の着こなしができる。	・全体集合時だけでなく、学校生活のあらゆる場面で「整える」ということを意識させた指導を行う。(教室の机の整頓等も)	・集会時の集合は速やかにできるようになったが、整列という部分ではまだ課題がある。 ・集会時にはどうするべきかを考えて行動できるよう指導(声かけ)を実施した。	・教員主導ではなく、生徒が自ら気づき、行動できるようになる指導を粘り強く実践する。	C	・教員主導ではなく、生徒が自ら気づき、行動できるようになる指導を粘り強く実践する。
2. 「確かな学力」の定着:基礎学力の定着＋キャリア教育の充実＋自信と誇りの育成	(基礎学力の定着) ・丁寧な学び直しが行われている。 ・学びに対する満足度が高く、真摯な態度で学習に臨んでいる。	・「基礎力診断テストのDゾーンの人数を10%減少させる」目標は3年次以外は未達成であったが、各年次で基礎学力の向上が見られた。 ・授業評価アンケートにおいて、多くの項目では3.0以上を達成した。 ・すべての年次、すべての調査回で学習力指数が2.5以上となった。	・生徒の学ぶ意欲が向上し、基礎学力の向上・定着がみられる。(基礎力診断テストの各教科のDゾーンの生徒の割合が各年次で年度当初より5ポイント減少) ・生徒の学習に対する満足度が高く、真摯な態度で学習に取り組んでいる。(授業評価アンケートの全項目が3.2以上)	・学力向上プロジェクトを中心に丁寧な学び直しを継続する。 ・ICT活用の研修、授業研究会の実施等、更なる授業改革を進める。 ・生徒との面談をおして生徒理解を進め、学ぶ意欲の向上を図る。自己肯定感を育む。	・国数英3科目教科を中心に振り返り学び直し学習に計画的に取り組んでいる。 ・第2回基礎力診断テストで、1年次・2年次とも国数英すべての教科でDゾーンの生徒の割合が減少した。(1年次の国英、2年次の国英数は5ポイント以上減少) ・iPadの校内職員研修を実施した。 ・ICTを活用した授業も多く実施されるなど授業改革にも積極的に取り組んでいる。 ・計画的に生徒面談を実施し、生徒理解に努めた。 ・出席状況は昨年より改善が見られるとともに、授業中も落ち着いて勉強に取り組む姿勢が見られる。 ・1学期自宅学習時間調査(6月実施)では、1年次は平均92分であったが、2年次・3年次は昨年に比べて学習時間が減少していた。	C	・基礎力診断テスト結果を分析し、学び直しが不十分な分野を明らかにして、的確な学び直し学習を継続する。 ・iPad活用等の職員研修を継続して実施する。 ・生徒が「わかった」「できた」という成功体験を実感できる魅力ある授業づくりに取り組み、生徒の学ぶ意欲、自己肯定感を高める。 ・丁寧な面談を継続して実施する。 ・課題等を含めた家庭学習の習慣づけに取り組む。	
	(キャリア教育の充実) ・将来の社会生活や職業を見据えた科目選択と進路決定がなされている。 ・進路に係る教科外活動にも積極的に取り組んでいる。	・多くの生徒が自分の将来や進路について考えているが、目標の実現に向けた方策や行動が不十分である。 ・目標設定に迷い、進路志望が未定のままで学力不振となったり、学習意欲を減退させたりしている生徒もいる。 ・講演会やサマーワークのインターンシップ等、生徒の進路意識高揚につながる取り組みを各年次で実施した。 ・進路学習取り組み度については、2年次生で向上が見られたが、1年次生においては変化がなかった。	・将来の社会生活を見据えた進路目標を見定め、意欲的に努力を積み重ねている。(学校評価アンケートで「思う」とする割合が昨年度より10ポイント向上) ・講演会等進路に係る教科外活動を通じて生徒の進路意識が高まっている。(学校評価アンケートで「思う」とする割合が昨年度より10ポイント向上)	・「産業社会と人間」、「青谷学」、「総合的な学習の時間」、「課題探究」等の科目をおして、生徒自らのキャリアデザインの意識を高揚させる。 ・進路指導部を中心に、生徒の進路探求の方法について再検討し、系統的な指導体制を確立する。 ・進路に係る校外での活動に引き続き積極的に取り組ませる等、進路探求に取り組ませる。	・新しい教材を取り入れて生徒のキャリアデザイン意識の高揚に意欲的に取り組んでいる。 ・2年次生においては、進学就職の希望によらず、「サマーワーク」として多くの生徒がインターンシップを実施(44名中37名)し、就労意識を高めることができた。 ・1年次生においては、「卒業生講演会」等を実施し、進路意識の高揚を図った。	・計画されているキャリア教育プログラムの実施に取り組むとともに、それぞれの活動を振り返り、生徒の進路探究の方法について検討し、系統的な指導体制を立案する。 ・インターンシップや講演等で高まった進路意識が、明確な進路目標の決定につながるように、事後指導や進路面談を充実させる。	B	・計画されているキャリア教育プログラムの実施に取り組むとともに、それぞれの活動を振り返り、生徒の進路探究の方法について検討し、系統的な指導体制を立案する。 ・インターンシップや講演等で高まった進路意識が、明確な進路目標の決定につながるように、事後指導や進路面談を充実させる。
	(自信と誇りの育成) ・生徒会活動や学校行事に積極的に参加している。 ・部活動が活発で、活動への意欲が高い。	・生徒会活動や学校行事に意欲的に参加する生徒が増加しつつある。 ・活発に活動し、大会等で上位入賞等の成果をあげた部もあった。 ・生徒減による部員数の減少により、活動の維持、存続が困難な部もある。	・生徒会活動や学校行事において、自主的で活発な取り組みが見られ、生徒個々の参加意欲や貢献意欲が高い。(学校評価アンケートで「思う」とする割合が昨年度より10ポイント向上) ・多くの生徒が部活動に継続的に取り組み、学習との両立に努力し、高い満足と自信と誇りを持っている。(学校評価アンケートで「思う」とする割合が昨年度より10ポイント向上) ・部活動の再編成について、方向性を明示する。	・生徒会活動や学校行事等の様々な場面で生徒に達成感を持たせる。 ・自分を成長させる大切な場として、部活動の意義について啓発し、加入を促進するとともに継続的に取り組ませる。	・学校祭等の学校行事において、生徒会を中心に生徒が意欲的に企画・運営し、多くの生徒が活躍できる場面があった。 ・韓国の居昌中央高校との交流事業に積極的に参加し、充実した生徒交流を行った。(生徒交流参加者は20名) ・自分たちがアイデアを出し、「とっとり夢プロジェクト」に応募して採択され、学校や地域の活性化につながる活動に取り組む主体的で意欲的な生徒の活動が行われている。(中心メンバーは3名) ・今年度の部活加入率は72.9%であった。(5月1日時点)1年次生の加入率が例年に比べて低かった。 ・各部の部員数が減少している中で、助っ人として他の部の大会等への出場を助け合う生徒の姿が見られた。 ・部活動の再編成について、年度当初の職員会議で方向性を示した。	・今後の学校行事や生徒会行事においても生徒を中心に運営できるよう指導していくとともに、各行事の振り返りを行い、今後一層より良いものになっていくよう検討する。 ・部活動の再編成については、継続的に検討を行う。	B	・今後の学校行事や生徒会行事においても生徒を中心に運営できるよう指導していくとともに、各行事の振り返りを行い、今後一層より良いものになっていくよう検討する。 ・部活動の再編成については、継続的に検討を行う。
3. 地域との連携を推進する	(地域への情報発信) ・学校の特色や生徒の活動などが適宜発信され、保護者、地域の理解度が高い。 ・生徒の校外活動が積極的で、地域からの理解や信頼が厚い。	・PTA広報誌の定期的発行(年4回)に協力し、学校の情報を発信している。 ・学校HPでの速やかな情報発信に努めたが、部活動情報の発信が遅れがちだった。 ・学校行事やPTA総会等、PTA行事への保護者の参加者が少ない。 ・地域行事や地域清掃等のボランティアに多くの生徒が参加した。(延べ77名参加) ・英語の読み聞かせ等、青谷小学校と連携した行事を行った。	・PTA広報誌が定期的に発行されている。 ・学校HPが時宜を逃さずに更新されている。 ・HPで行事や部活動等、学校の特色や魅力が発信されている。 ・HPの閲覧者数が増加し、保護者や地域の方々だけでなく、中学生にも本校に対する関心、理解が高まっている。 ・学校行事やPTA総会等、PTA行事への保護者の参加率が昨年度より向上する。 ・地域行事等にボランティアとして積極的に参加して地域からより大きな期待と信頼を得るとともに、生徒が有用感を実感し自己肯定感を高める。	・PTAと一層連携し、PTA広報誌の内容の充実に協力する。 ・教務部を中心に定期的に学校HPを点検して更新が滞らないようにする。 ・授業、行事、部活動などの情報提供を呼びかける。 ・学校HPの更新頻度を上げて定期的に閲覧者数の確保を図る。 ・HPに行事のお知らせを掲載するとともに、PTA役員による参加呼びかけを行う。 ・ボランティアの情報を提供するだけでなく、ボランティアの意義等について啓発を行い、積極的に参加する生徒を増やす。 ・地域と連携し、生徒が有用感や自己肯定感を実感できるボランティア活動の推進に継続して取り組む。	・PTAと連携して、PTA会報誌を定期的に発行をした。 ・学校行事、授業の様子等、HPの更新を速やかにし、情報を提供できている。閲覧者数が4月からの約半年で約35,000人増加した。 ・学校行事やPTA総会等への保護者の参加率は、学校祭については例年に比べ1.5倍に上がったが、その他の行事では例年並みであった。 ・すくすく保育園のボランティアは、進路に関わる生徒が積極的に参加している。(前期は7名参加) ・浜村駅前の足湯清掃ボランティアに地域の方と協力して取り組んだ。参加者は生徒会執行部の5名で、昨年度より減少。 ・今年度は、青谷地域の行事「あおいち」に鳥取環境大学の学生と連携を取りながら、ボランティアとして参加した(10名参加)が、本校生が主体となった取組ではなかったため、生徒が有用感や自己肯定感を実感するまでには至っていない。	B	・HPの更新については、現在の取組を継続していく。 ・HPの古いデータを更新する。 ・保護者が日程調整等行いやすいように、行事等の案内をもっと早めに行う。 ・HP、メール等の活用等、保護者へのよりよい案内方法を検討する。 ・ボランティア参加者を拡大するためにボランティアの意義等についての啓発を行う。 ・生徒が有用感や自己肯定感を実感することができる活動にするために、来年の「あおいち」では本校生が主体となって取り組む場を設ける。そのために、「青谷学」において来年度に向けての企画を考えていく。	
	(地域人財の活用) ・社会人講師等による多様な講演や研修が行われている。 ・学校評議員や地域の有識者との意見交換が定期的に行われている。	・社会人講師や地域の有識者による講演等を開催した。 ・学校評議員会等をおして、学校外の方の視点で意見を収集した。	・地域、保護者の方から学校運営へ一層の協力が得られ、学校評議員や地域の有識者と定期的な意見交換を行う。(継続)	・学校評議員や地域人財との一層の連携を進める。 ・地域の人財の情報を収集する。 ・青谷学、地域環境芸術等の地域と密着した授業等をおして地域とのつながりを深める。 ・学校の現状や課題に即した講演会や研修を企画し、外部有識者の活用を一層促進する。	・青谷学等地域人財を活用した授業を実施し、生徒の地域理解を深めた。 ・「青谷学」を通して本校の教育活動に協力してくださる人財の情報等を収集できている。 ・青谷学を中心とする地域連携を進めているが、青谷学が選択履修から全員履修に変わったこともあり、体制整備が不十分である。 ・いのちの講演会等外部人財を活用した講演や授業を実施し、生徒が自らのあり方生き方を考える機会となった。	・新たに設立された「青谷高校を支援する会」を通じて、地域との連携をさらに強化する。 ・青谷学、地域連携に向かう体制を強化し、教職員の共通理解を進める。 ・青谷地域の歴史・文化・ジオパーク・地域活動等の教職員研修等を実施し、すべての教職員が青谷学についての理解を深め、生徒の育成にかかわることができるようにする。	C	・新たに設立された「青谷高校を支援する会」を通じて、地域との連携をさらに強化する。 ・青谷学、地域連携に向かう体制を強化し、教職員の共通理解を進める。 ・青谷地域の歴史・文化・ジオパーク・地域活動等の教職員研修等を実施し、すべての教職員が青谷学についての理解を深め、生徒の育成にかかわることができるようにする。